

## 研究・調査報告書

報告書番号	担当
253	独立行政法人酒類総合研究所
<b>題名 (原題/訳)</b> The effect of alcohol consumption on endothelial adhesion molecule expression 内皮接着分子の発現におけるアルコール消費の影響	
<b>執筆者</b> Sacanella E, Estruch R	
<b>掲載誌 (番号又は発行年月日)</b> Addict Biol. 2003 ;8(4):371-8.	
<b>キーワード</b> 内皮接着分子、アルコール消費	
<b>要 旨</b>  <p>内皮接着分子は感染症、腫瘍や慢性的炎症といった病気において重要な役割を果たしている。アルコール性肝炎や動脈硬化などの炎症性疾患ではエタノールが炎症反応を調節しているのではないかと考えられており、これらの炎症性疾患におけるエタノール消費と内皮接着分子の関係について研究がなされている。このことから、動物やヒトにおける <i>in vitro</i> の実験でアルコール飲料のエタノール画分と非アルコール画分が及ぼす単球や内皮接着分子といった動脈硬化の生体マーカーへ影響が調べられた。これらの研究ではアルコール飲料のエタノール画分と非アルコール画分（主としてポリフェノール）の両方が血管内皮への単球の接着を減少させるとともに、血管内皮の intracellular adhesion molecule-1 (ICAM-1)、vascular cell adhesion molecule-1 (VCAM-1) や E-selectin といった内皮接着分子の発現を減少させることを示した。</p> <p>以上の結果は適度なアルコール摂取が心臓血管系における抗炎症効果を示し、また動脈硬化初期の血清マーカーを減少させることを示している。しかしながら、エタノールの大量摂取は炎症効果に影響を及ぼす可能性があり、実際に、慢性アルコール中毒患者の血清では著しく内皮接着分子レベルが高く、アルコール性肝炎や肝硬変患者では E-selectin、ICAM-1、VCAM-1 のレベルが上昇していることを考慮しておく必要がある。</p>	